桃園川とその変遷

原田 弘

今、桃園川といっても川の時代を思い出される方は少なくなったのではないでしょうか。

杉並区を西から東へ流れる神田川、善福寺川そして桃園川は区内の三大川といわれ、その両岸は大きく水田が広がっていたものです。この水田が一番早く宅地化されたのが桃園川で、それは明治二十二年の甲武鉄道の開通と無関係ではありませんし、続く中野駅、また大正十一年には阿佐ヶ谷、高円寺両駅の開設、それに決定的機会を与えたのが関東大震災後の西郊発展政策です。

高円寺駅より南方を望む（大正14年）
佐藤人止氏蔵

しかし、明治四十年代に高円寺町にあった藍染め工場などが廃業して、その跡地へ市街地整備で立ち退きとなった寺院が移転して高円寺町の出現となりました。私どもは新開地と呼んでいました。

蛇行して多くの小川などを吸収し流れていた桃園川も真っ直ぐに改修されました。川の両岸に住宅が建てられ道路も真っ直ぐに整備されました。

大正時代の桃園川周辺／小林信敏氏蔵

駅の南へ下ったところに高円寺館という映画館ができ、その前にぞろりとカフェーが立ち並びました。作家の平林たい子がいたのもその一軒です。彼女の「砂漠の花」といういう作品の一節に「高円寺の裏から馬橋にかけて、まだ田んぼがあった。田んぼのおわりに釣り堀があって、柳瀬正夢氏の住んでいる馬橋の家々のかたまりが、向こうに見えていた」と震災後の情景を作品にとり入れています。

川には橋と橋の間に学校の平行棒のような角材がはめ込まれていたので子供たちはこの上を渡っていました。

現在の高円寺図書館のところが杉三小学校で北側は雑木林の斜傾になりその下の処に水が湧いていました。蛙公園など格好の遊び場で軍艦の模型などスクリューを廻し水を走らせたものです。宝橋の南の空き地によく「木下サーカス」など架かり掛かんな見に行ったものです。

桃園川緑地（現在）

少し雨が多く降ると川はすぐ満水になり北のエトワール通り、南側の通りもみるみる浸水したが、あと引くのも早かったし、引いた後、石がごろごろしていました。また、馬橋の釣り堀から鯉が流れて来たのも面白く、当時の杉三小学校の校長など学校下の今の大久保通りで膝まで浸かって児童を渡らせていました。もう六十年余り前のことです。

＊上記2枚の写真は森 泰樹 著「杉並風土記」より転載

原田 弘 氏
杉並郷土史会会長・(元)日本歴史学会会員・杉並区文化財保護指導員・日本ペンクラブ会員

次号
145号は
11月20日
発行予定